

---

# 一通の手紙

篠宮 楓

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一通の手紙

### 【Nコード】

N1647T

### 【作者名】

篠宮 楓

### 【あらすじ】

隣の席の草間くんは、周りが太鼓判を押すぐらい頭はいいけど変わってる人。ある日、彼の机に手紙が入っていた。

「……これは、なんだろう……」

朝、遅刻気味の隣人が、HR開始ぎりぎりに走りこんで席に着いた途端、ぼそりと呟いた。

その手は、机の中に入ったまま。

反対の手は鞆を机の横に、掛けようとしているところで。

そこには、朝、妹の佳奈子ちゃんが持つてきたお弁当バッグが掛けられていた。

「いつものように、佳奈子ちゃんがお弁当置いていって来てたよ？」

いつもの事なのに何を疑問に思ってるんだろうと、一限目の教科書を机に出していた私は、隣人、草間くんに聞いてみた。

「草間くん、お弁当要らないの？」

草間くんは眉を顰めたまま私の方を向くと、ぎこちなく口を開いた。

「おはよう、深山さん」

「おはよう、草間くん。……じゃなくて」

間の抜けた挨拶に少し苦笑する。

草間くんは視線を机に戻してから、もう一度私を見た。

「なんか、知らないものが入ってる、……気がする」

「お弁当のことじゃないのね。ていうか……、気がするってどういふ事？」

「薄い紙みたいなの、なんかそんなものが入ってる」

「……紙？」

隣人、草間くんは周りが太鼓判を押すぐらい頭はいいけど変わってる人。

朝が弱いらしくて、遅刻気味。

理数系が大好きで、常に学年一位。けど、古文だけ十位。

十位でも凄いやと思うんだけど。

ま、それくらい頭がいい人。

故に、私では考えられないけれど毎日机の中を空にして帰る。

ロッカーの中身も少ないらしい。

まあ、自宅から歩いて五分という好立地にある高校に通っているから出来る技だと思うけど。

私なんてテスト前くらいしか教科書持ってかえらな……

そこまで考えて、すぐに意識を現実に戻す。

目の前の草間くんは、若干うるたえ気味のままじつと私を見ていた。

「あ、ごめん。毎日机を空にするのに、確かにおかしいね。とりあえず出してみたら？」

「……また、数学教師の挑戦状だったら面倒だと……」

「……ははは。それは先週やったばかりだから、さすがにないでしょ」

隣人、草間くんは周りが太鼓判を押すぐらい頭はいいけど変わってる人。

頭はいいけど、浮世離れた日常を送っている。

お昼にご飯を食べずに本を読んで終わってしまったたり、気付いたら上履きで体育を受けてたり。

ちなみにバスケットでシュートしようとしたら靴が脱げて、そこで上履きを履いているってことが判明したらしい。

気付こうよ……。

そんな彼の大好きなのは部活動で、所属は地学部。

部長もやっている彼は、部活の副顧問でもある数学教師、脇坂先生からたまに挑戦状を受ける。

大学とかで習う数学らしいけど、私にはまったく分からない。

私が愛するのは日本史……

そこまで考えて、再び意識を現実に戻した。

目の前には、さっきと同じく私を見ている草間くんの姿。

「ごめん」

「いや、深山さんがすぐに違う世界に行ってしまうのは、この席になつて嫌というほど理解したから。大丈夫」

「……、褒め言葉として受け取ります。とりあえず、出してみなよそれ」

机を指さすと、草間くんはゆっくりと手を引き出した。

……

「何も持っていないじゃない」

その手には、何も掴まれていない。

草間くんは少し机を私の方にずらすと、自分は椅子ごと後ろにずれた。

「深山さん、取ってくれないか？」

「え、なんで私が」

挑戦状だったら、まったく答えられませんかよ。

「もし挑戦状だったら、丸めて捨てて」

「いいの？」

「いい、面倒」

「じゃ、自分でやればいいじゃない」

至極もつともな返答をすると、草間くんは首を振った。

「見たら、やらないと気が済まなくなるから」

隣人、草間くんは周りが太鼓判を押すぐらい頭はいいけど変わってる人。

その上、大人しい風貌とは似合わず、最強が付くぐらいの負けず嫌い。

私は、まーいつか、位の気持ちで草間くんの机に手を伸ばした。

草間くんは本当に見たくないのか、目を逸らしたままその時を待っている。

なんだか面白い構図だな、そんな事を思いながら机の中にあるはずの彼曰く“なんか、知らないもの”を手に取った。

……？ 紙というよりは、封筒？

首を傾げながらそれを取り出してみると、なんの表書きもない封筒。

「どう？ 挑戦状？」

早く何かを知りたいのか、そっぽを向いたまま草間くんが急かして来る。

「え、ちよつと待って」

いつも見る挑戦状じゃない気がするんだけど、脇坂先生、今回凄く自信があるとかそーいう感じ？

封筒をひっくり返して見ても、封がしてあるだけで何も書いていな

くて。

「まだ？」

再度急かして来る彼に追い立てられるように、仕方なく透かして見ようと目より少し上に翳してみた。

好きです

見えた文字に、目を見開く。

す……き……？

「っ、ちよっ、これラ……！！！」

「って、わっ！」

ラ、の時点で気付いたのか、思いつきり焦った声を上げて私の口を草間くんが右手で塞いだ。

そのまま空いた片手で、私の手から手紙を奪い去って机の中に突っ込む。

ラ、だけで分かるとは流石秀才！ じゃなくて！

その手紙の存在もあれだけど、この状況も私の心臓を壊そうとして

いる感じですよ！！

「草間 和仁、深山 沙奈。お前ら一体、何をしてるんだ」

「……！！」

状況にそぐわない冷静な声に二人して顔を上げると、担任が両腕を前で組んで私達を見下ろしていた。

「独身教師に対して、嫌味か？ あー、どうせ彼女もいないさ！

いちやついてないで、さつさと前向け。HR始めるぞー」

途中から周りの生徒に向けて声を張り上げたのか、そのままぐるりと後ろを向いて教壇へと歩いていった。

草間くんは慌てて私の口を塞いでいた手を離すと、ごめんと小さく呟く。

私は私で凄く驚いていたけれど、ゆで蛸のように真っ赤になった彼を見て反対に気持ちが悪く落ちてきた。

そこである事に気づいて、鞆からちり紙を出すとそれを草間くんの机に置く。

「……？」

まだ真っ赤になったままの草間くんは、何？ と首を傾げた。

「リップつけてるから。多分、手についちゃってると思う」

どうしても秋から冬にかけては唇がかさつくから。

草間くんは慌てたように手のひらを見ると、いきなり立ち上がった。

「……草間、どうした」

連絡事項を話していた担任が、呆気に取られたように瞬きを繰り返

して。

「忘れ物したので、取ってきます!」

そう一気に言うと、草間くんは走り去っていった。

「どうしたんだ、あいつは」

担任の言葉に、クラス一同、同意するように首を傾げた。

その後一限目をサボった草間くんは、真っ赤な顔を真っ青にして帰ってきた。

「……………どうしたの？」

なんとなく朝とリンクするような言葉を、草間くんにかけてみる。草間くんは、なんでもないと二限目の教科書を鞆から出す。それは数？。脇坂先生の担当教科。

授業の鐘が鳴って、脇坂先生が入ってくる。文系の私にとって、頭がこんがらがる時間。ため息をついて、シャーペンを手に取った。

本当は、聞きたい。

さっきのラブレターの返事、どうするの？

「ねー、沙奈。なんだったの、朝」  
被服室の隣にある手芸部の部室。

そこで同じ部活の子と、昼ごはんを食べようとやってきた。  
一緒に食べるのは、同じクラスの子が三人と他クラスの子が二人。  
故に、朝の草間くんとのやり取りを見られているわけ。

「んー、なんかよく分からない」  
でも、ラブレターを貰っていたなんて事、他の人に言っていること  
じゃないだろうから。

おにぎりを食べようとしていた他クラスの子が、何々？ と興味津  
々な目を向けてきて。

なぜか私じゃなく、同じクラスの子がそれに答えていた。

「でも、真っ赤な顔の草間って初めて見たね」

「なんか進展あったのかと思ったのに」

にやにやと私のわき腹をつついてくる子から、身体を反らす。

「特に何も無いわよ」

「えー、どう見たって二人とも仲いいのに」

「それは、そーいう意味じゃなくて。なんとなく、世話やいてるっ  
ていうか」

やつきになって言い返せばそうするほど、彼女達が囁し立てると分  
かっているのに止められない。

「草間って、頭いいくせに日常生活浮世離れしてるもんね。美術の  
授業に書道の道具を持ってきた奴、初めて見たし」

「あれは、妹さんのバッグと間違えたって……」

「で、一年の妹が沙奈に美術バッグ渡して？ 沙奈が、美術室に走  
って？」

「おかーさんよね、もう、ホント。悪いけどクラスではほぼ公認だ  
から、あんたらカップル」

きゃはは、と高い声で笑う彼女達に、もう何も言つまいと私は口をつぐんだ。

草間くんの妹の佳奈子ちゃんは、一つ下の一年生。

浮世離れた兄の為に、いろいろ苦労してる。

お弁当を渡しに来るのは、いつもの事で。

ジャージとか今言つてた美術バッグとか、その他いろいろなもの持ってくるから、必然的に話す機会が増えた。

草間くんと違って、イマドキの子らしく明るくて可愛い。

今日も、いつもの如くお弁当を持ってきてた。

「……あれ？」

そう言えば、何か机に入れていた気が……

そこまで考えて、顔から血の気が引いた。

もしかしてさっきのラブレター、佳奈子ちゃん……？

だって、もし友達からの預かりものなら名前書くよね……？

え、おにーちゃんを好きってこと？

え、嘘。え、え？

「どうしたの、沙奈。顔、真っ青」

「うえ？」

いきなり現実に戻されて、おかしい声上がる。

一緒にご飯を食べていた皆は、怪訝そうに私を見ていた。

言えない、こればかりは言えない……

私はばたばたとお弁当を片付けると、皆の視線から逃れるように部屋を後にした。

教室に帰ってきたものの、隣の席に草間くんはいなかった。お弁当をいつも入れているバッグもなかったから、きっとどこかご飯を食べにどこかに行っているんだろう。

私は自分の席に腰を降ろすと、頬杖をつく。

窓際の席は、午後の陽光でぽかぽかしていて。

窓の向こうは、真つ青な青空。

春や夏は綿菓子みたいな雲が多いけど、秋口は薄くかすれたような雲が多い。

草間くんに聞いたら、理由を教えてくださいのかな。

「……」

“草間くん”の名前に、思わず頬が熱くなっていく。

朝、口を塞がれた際に触れた思いの外大きかった手のひらを、思い出して。

そして、一気に血が逆流していく。

いつも笑いながらお弁当を持ってくる、佳奈子ちゃん。

おにーちゃんを好きになる気持ちは分からないけど、人を好きになる気持ちなら分かる。

勉強しか目に映っていないさそうな草間くんに対して、他の誰よりも近い人間だと思ってた。

それを、喜んでた。

いつか、その気持ちが伝わらないかと思ってた。

なのに

朝、真っ赤になっていた彼の姿が脳裏に浮かぶ。  
そして、真っ青になって帰ってきてた。  
その間に、返事をしたのかな。

聞きたいけど、聞けない。  
知りたいけど、聞けない。

怖い  
こわい  
コワイ……

「……………ま、み……………やまさ……………深山さん？」  
「……………っ！」

現実に戻された私の目の前には、草間くんのドアップ。  
焦って身体を後ろに引いたら、床と擦れた椅子の足が嫌な音を響かせた。

「あ、ごめん。驚かせて。もう授業始まるよ?」

「う……、あ、うん」

早鐘を打つ鼓動をそのままに、机から古文の教科書を取り出す。

「どうかした? 数学でもないのに、深山さん顔色悪いけど?」

その声に顔を上げると、じっと私を見つめる草間くんと目が合った。

さっきと違って、真っ青な私といたって普通の草間くん。

「うん、大丈夫……」

何とか笑顔を作って、視線を手元に戻した。

「でも……」

何か草間くんが言いかけたけど、先生が入ってきてしまってそれは途切れた。

いつもなら楽しい古文の授業も、まったく頭に入っていない。

耳にはいつてもそのまま流れていく。

時々、草間くんから視線を感じるけど怖くて顔を上げられなかった。

頭の中は、一つの疑問に囚われていて。

受け取ったのかな。

でも、実の兄弟で……

「まさか……」

思わず呟いてしまつて、口を右手で塞ぐ。

血が、繋がってない、とか……！

「あの」

突然隣から声が上がつて、私の腕が掴まれた。  
驚いて顔を上げると、草間くんが立ち上がつて私の腕を掴んでいた。  
クラス中の視線が草間くんに向いているのに、本人はあまり感じて  
いないらしい。  
まっすぐ、古文の担当教師を見ている。

「深山さん、具合が悪そうなので、厚生室に連れて行っていいです  
か？」

「あら、大丈夫？ 辛かったら早退してね」

心配そうな顔なのに、なぜか微笑ましそうに見る古文の先生。  
その声には私は慌てて頭を横に振った。

「あの、私大丈夫で……」

「連れて行きます」

私の言葉を遮るように言って、私の腕を引き上げる。  
引っ張られるまま立ち上がって、歩き出した。

「それにしても、いつもと反対ねえ。たまには、面倒見てもらいな  
さい」

先生の声に、クラスの雰囲気心配から笑いに変わったのは言うま  
でもない。

静かな廊下を、草間くんの手を引かれて歩く。

ドアの向こうでは皆がいて、先生が授業をやっているなんて分からないほど静か。

草間くんは、手を離してくれない。

あれだけ悩んでいたのに、触れていることに嬉しさを感じる私っておかしいよね。

佳奈子ちゃんの笑顔が、ちらついて思わず目を瞑った。

「草間くん、本当に大丈夫だから……」

足を止めて小声でそう伝えると、草間くんが振り返る。

「顔、真っ青。いつも世話掛けてるんだから、たまには返させて」

「でも、大丈夫だし……」

具合が悪いわけでもないのに、厚生室でなんて言えばいいのか……誤魔化せばいいのに、そこまで頭が回らなかった。

草間くんは眉を顰めて私を見下ろしていたけれど、ため息をついてまた歩き出す。

一階の厚生室を通り過ぎて、校舎を出た。

「どこ行くの？」

「いいから」

そう言っても、止まらない。

そのまま部室棟まで来ると、最上階の一番奥のドアを開ける。

## 地学部

そう書いてある札を見て、草間くんが部長をしている地学部の部室だと気付く。

「どうぞ」

促されるまま中に入ると、十畳くらいのスペースにソファと本棚、なぜかポットが置いてあった。

草間くんはさっさとドアを閉めると、ソファに腰を降ろす。

「座って」

ぼんぼん、と草間くんが腰掛けた隣を手で叩かれた。

え。となり、に？

傍によるのを躊躇していたら、手を掴まれてソファに座らされた。草間くんから少し離れて座ったけれど、それでも緊張する。

「深山さん、上、見て」

「え？」

俯いて手元を見ていた私に、草間くんの声が掛かる。

問い返しながら草間くんを見ると、深くソファにもたれながら彼を上を見ていた。

「上」

再び掛かる声に、私は彼と同じ様に上を向いた。

天井に向けた視線に、キラキラとした光が映る。

「……………うわ……………」

そこは一面、引き伸ばされた天体写真が貼ってあった。

キラキラと、小さな星が光ってる。

「凄いだろ？ 去年卒業した先輩の、ある意味卒業制作」

「卒業制作？」

「そう。光って見える星、全部スワロフスキー……だっけ？ あれ、貼ってある」

……

「ええっ?!」

びっくりして、立ち上がる。

目を凝らしてみると、確かにデコ用のクリスタルが貼り付けてあるのが見えた。

「その先輩が二年の時に撮った写真を引き伸ばして、時間と金を使いまくってこつこつやってた。ま、俺たちも手伝ったけど」

「……すごいね……」

そう言っつて、ゆっくりとソファに座る。

いくつにも分割して拡大しただろう、天体写真。

それに一粒一粒、星に見立てたクリスタルを貼り付けていく。壮大で、気の遠くなる作業。

「女の先輩だからこそその、発想なんだろうけど。俺達じゃあ、こんなこと考え付かない」

「へえ……、ロマンチストな先輩だね」

「その代わり、とても静かな部活時間が続いたけどな」  
「だろっね」

カニを食べる時と一緒だよな。  
夢中になると、皆、無言。

その部活風景を想像できて、思わず口元が緩んだ。

「夜見たら、キラキラしてもっと綺麗だろうな」

「そうだなあ。これ夜中まで貼ってた時があったけど、確かに綺麗だった」

本物の宇宙みたいに、目に映りそう。

しばらくそれを見上げていたら、視線を感じて隣を見た。草間くんと目が合って、意味もなく鼓動がはねる。

だって、微笑ましく見られてる、そんな感じだから。

「少しは、元気になった？」

「……え？」

赤くなりそうな頬を隠そうと右手でそこを押さえていたら、草間くんに問いかけられては少しした視線を戻す。

「顔、青かったし。何か、悩み事？ いつも迷惑掛けてるし、聞くよ？ 役には立たないかもしれないけど」

「え。なや……み……」

ラブレター、どうしたの？

差出人は、佳奈子、ちゃん？

一番聞きたいことが思い浮かんで、頭をぶんぶんと振る。聞けない。

それは、聞けない。

「深山さん？ また顔色が……」

「やつ……」

いきなり触れられた手を払うように、立ち上がる。

目を見開いた草間くんの顔を見ていたくなくて、俯いた。

「大丈夫だから。だから……」

「深山さん？ どうした？ なんか、いつもの君らしくない……」  
「っ、なんでもないってば！」

草間くんの視線から逃れるように、ドアから飛び出した。

「深山さん！？」

懸命に足を動かして、その声から逃げる。

けれど階段から一番離れている場所だったからか、本当に具合が悪くなっていたのか、足がもつれてなかなか階段までたどり着けない。

「深山さん！」

追いかけてきた草間くんに、腕を引かれて立ち止まる。

「本当に、何があった？ いつも俺を叱り飛ばしてる深山さんが、こんなに弱るなんて」

「別に、何もな……」

「なくないだろ！？ 何？ 俺じゃ、言えない？」

「く……さま……」

「頼りないのは分かってるけど」

「ちがつ……！ だって、朝の……っ」

思わず言ってしまった言葉に自分が驚いて、掴まれていない手で口を塞ぐ。

草間くんは目を見開いたまま、私を見下ろしていて。

「朝、の？」

「なんでもない、その……」

腕を離してと続けようとした言葉は、草間くんに遮られた。

「部屋戻ってて。鍵預けとくから、絶対にいるよ」

「え？」

手のひらに押し付けられた鍵。

それに視線を落とした瞬間、目の前にいた草間くんが物凄い勢いで走り去っていった。

「なんなの……？」

呟いた声は、誰にも聞かれることなく静かな廊下に消えた。

仕方なく部屋に戻って、ソファに座る。

帰ってもいいとは思ったけど、鍵を預かったままだし、開けっ放しのまま帰るわけにも行かない。

ため息をついて、天井の写真を見上げた。

日の光にキラキラと輝く星が、本当に綺麗。

それを見ているだけでも、穏やかな気持ちになってくる。

そうだよね。

私の彼氏なわけじゃない。

なのに、心配かけて……

私が一方的な好意を持っていただけで。

草間くんにとっては、世話焼きなクラスメイトでしかないんだから。

頼りないのは分かってるけど

思い出した草間くんの声に、頭を振る。

そのまま目を瞑った。

頼りなくなかない。

あんな事、好きな人に言わせて私って本当に何様。

心配してくれるだけ、それだけでも特別で嬉しいってそう思わな  
き  
や  
……

「あれ、寝てる？」

しばらくして戻ってきた草間くんの声に、私は目を開けた。

「……起きてるよ」

寄りかかっていた背もたれから上体を戻して、草間くんを見る。

彼は鞆を二つ持っていて、一つを傍の机に置いた。

「具合悪いから早退するって、言ってきた。勝手に悪い」

「え？ ううん、ありがとう。ていうか、草間くんも？」

鞆、二つあるし。

草間くんは自分の鞆を持ったまま、私の隣、さっき座っていた左端に腰を降ろした。

「送るからって」

「え、それはごめん。でも、もう私大丈夫だよ？ 元気、元気」

あははー、と軽く笑う私の目の前に、見たくないものが差し出された。

それは真っ白い封筒で。

血の気が、引く。

「これ、だろ？ 気にしてたの」

「あの……」

じっと、封筒を見つめる。

やっと、さつき落ち着かせたのに。  
どうして、蒸し返すの？

「中、見えたんだよ……な？」

手元に戻した封筒を見ながら、草間くんが言う。

「……うん、見た」

好きですって……

私が頷くと、彼は、はあぁっと大きくため息をついた。

「じゃあ、それで体調悪くしたのか？」

「そういうわけじゃ……」

既に顔色を無くしている私が言っても、まったく説得力がない。

草間くんは寂しそうに笑うと、封筒を握り締めた。

「そっか、そうか。ごめん、その……悪かった」

「謝られることじゃ、ないし」

「ん？ まあ、そりゃそうだけど……俺の所為だろ？」

「……」

草間くんの所為といえは、確かにそうだけど。

俯いたまま返事をしない私に、草間くんはその封筒を押し付ける。

「まあ、せっかくだから貰って。中、ちゃんと見て」

「は？」

貰って？

「いいよ、もう分かってるから。でも、せっかくだからさ」

せつかくだから？

頭が真っ白になって、草間くんを見つめた。

せつかくだから、貰ったラブレターを見ろと？

草間くんは決まり悪そうに苦笑しながら、封筒を私の膝に置いた。

「いいだろ？ 俺の世話を焼いてくれてたの、深山さんなんだから。最後だし、我俣聞いてくれよ」

最後？

「流石に俺でも、こうなった以上、この先深山さんの世話になろうとか思わない」

目の前が、歪む。

目じりに涙がたまったことに気付いて、反対側に顔を背けた。

「そっかー。じゃあ、最後にお世話焼いておこうかな」

明るい声を出して、指先で封筒の封を切る。

私の立場って、一体何？

そう思ってしまう自分がいるけど、それでも。

きちんと見た方が、諦めつくし。

中には、便箋が一枚。

折りたたまれたそれを、震えそうになる指先でゆっくりと開いた。

深山 沙奈さま

好きです

草間 和仁

「……………え？」

頭が真っ白になった。

深山……………沙奈？ 私？

思い込んでいたものじゃない名前が、その手紙には書いてあって。

意味が分からないまま、草間くんを見る。彼は首の後ろを押さえながら、苦笑した。

「いや……その、書いてみたかったただけなんだ。渡すつもりはなくて……」

「え？」

ちよつと、待って。

「でも、そんな体調崩すくらい断るのに悩まれるって知ったら、こは砕けとこうと。悪かったな、ホント」  
はは、と笑う彼の口調は重い。

「これ……、佳奈子ちゃん……」  
が、差出人じゃ……

そう呟くと、草間くんがため息をつく。

「少し前に部屋で書いてたのを見つけてさ、隠しておいたんだけど。佳奈子の奴、人の部屋漁った上に机に入れやがって」

「漁る……？」

「そう。だからホント朝は焦った。分かっていたら、深山さんに取ってなんていわなかったのに」

え、どういうこと？

「佳奈子ちゃんから、草間くんへの手紙……じゃない、の？」

「……は？　なんで佳奈子から、俺？」

呆気に取られたような表情で問いかけてくる草間くんを、じっと見つめる。

「朝、見えたんだろ？ 俺から深山さんへの……その……って言い難そうに誤魔化す草間くんの言葉に、頭を横に振った。

「好きですって、一言だけ……」

「は？」

「好きです、しか見えなかった。名前までは……」

「はぁー!?」

大きな声を上げて立ち上がった草間くんに驚いて、びくりと肩を揺らす。

草間くんは気付かないのか、立ち上がったまま私を見下ろしている。

「え？ じゃあ、どうやって断ろうか悩んで具合悪くしたとかじゃ

……」

「……ない」

ぶわっと、草間くんの顔が真っ赤に変わった。

そのまま力尽きたように、ソファに沈んでいく。

「え？」

その変化に、私の方が呆気に取られた。

両手で顔を押さえたその指の隙間から、草間くんが私を見た。

「なんだよ、じゃあ……俺、恥かいただけ……?」

「え？ うえっ……」

「この手紙の所為じゃなかったら、今、当たって碎けなくてもよかつたわけだよな……」

「いや、その、手紙の所為って言うか。その……っ」

口籠る。

便箋には、確かに私の名前。

もしかして、私。物凄い勘違いをしていたんじゃない……

「その。佳奈子ちゃんが……」

そこまで言って、やっぱり口籠る。

もし………ていうか、确实、間違ってたよね。物凄い、恥ずかしい勘違い。

草間くんは両手を降ろして、私を見つめた。

「あさ。さつきから、佳奈子の名前が出てくるけど。あいつがどうかしたのか？ なんか言われた？」

言われたって……

慌ててその言葉に、頭を横に振る。

「……いや、その……。佳奈子ちゃんが、朝、机に何か入れてたの思い出して……」

「それで？」

なんか、怒ったような声に変わったと思うのは、私の聞き間違いでしょうか

「佳奈子ちゃんから、その……草間くん宛て……か、と」

静まり返る。

それは、一瞬。

「妹なんだけど」

う、声、怖い。

「っと、だから……その……血が繋がってないとか……」

「実の兄妹だけど。ていうか、どんなドラマだよ、それ」

「もしくは、名前を書かないで気持ちだけ伝えたいとか……」

どンドン声が小さくなっていくのは、草間くんの顔が怖いから。

何を言えばいいのか分からずに俯いてしまった私は、それでも何か言わなきゃと口を開くと草間くんの視線に止められた。

「……え」

おかしい。

怒ってなかったっけ？

私を見るその顔は、なにやら楽しそうだ。

感じた事のない悪寒が、背中を走る。  
なんとなく、危険な感じ、が、する。

「深山、さん」

「はいっ」

逃げ腰になる私の腕を、草間くんが掴んだ。

「どうして、俺宛のラブレターで、具合悪くなったのが聞いていい？」

「……っ」

目を見開くと、楽しそうに草間くんの目が細まる。

「嘘は聞かない。答えは分かってるから」

「っ、な……なんでいきなりそんな強気……」

目を細めたまま苦笑する草間くんは、ハッキリ言っただけ怖いです！

「そりゃ、これだけ恥かけば？ もう、これ以上ない気がするし？

ね、勘違いの原因である深山さん」

「そっ、そんな！ 大本の原因は、草間くんじゃない」

その手紙をさっさと私にくれていれば、こんなに悩むことなかったのに！！

「数学と一緒にだよ、深山さん。答えは一つだから。苦手な君でも答えられるだろう？」

「そんなんっ、数学とこれは違う……っ」

「早く、答えて」

身を乗り出してきた草間くんは、至近距離で聞かれて思わず目を瞑る。

うっうあああっ！

ちよっ、どんな体勢！？

これ、どんな体勢！！

ばくばくと高鳴る鼓動が、頭に響き渡る。

「こたえ」

すぐ傍で聞こえた声に、思わず口が開いた。

「す……好き、だ、からっ」

ごくり、と息を飲む音がする。

「よかった……。でも……」

ちっとも嬉しそうじゃない声が、言葉を続けた。

「この状態で、目を瞑られるのは……色々とマズイ……」

「……っ」

反射的に開けた目に映ったのは、ドアアップな草間くんの顔で、見た事もない強い視線に、体が固まる。

こっ、これはっ！

これって……！

緊張が最高点に到達した、その時だった。

「おにーちゃん、何の用……!?」

ドアを思い切り開ける音と共に、可愛らしい声が部屋に響いた。

「ごめんなさい、深山先輩」

目の前でしょぼくれる佳奈子ちゃんに、もついいよと笑顔を向ける。

あの後大声を出して部室から飛び出そうとした佳奈子ちゃんを、す  
んでの差で草間くんが捕まえて。

そして朝のラブレターのことを、謝られた。

説明させる為に、さつき教室戻った際、佳奈子ちゃんにメールした  
んだったと草間くんが言ったのはその後。

頼むから、もっと早く思い出して！

あんな恥ずかしい場面、見られなくなかったわ！

で、現在に至る。

「だって、おにーちゃんてばレトロにラブレターなんて書いてちゃっ  
てさー。さっさと渡しちゃえてけしかけても、まったく聞きゃし  
ないんだもん。だから、机に入れといてやれば、渡す勇気が出るか  
と思っただけど」

「お前は、もっと女性らしく振舞えないのか」

少し離れた椅子に座っていた草間くんは、少し不機嫌そう。

佳奈子ちゃんは、同じ様に不機嫌そうな視線を草間くんに向けた。

「おにーちゃんは、もっと男っぽくなった方がいいんじゃないの！  
邪魔されたからって、怒っちゃってさー。顔に似合わず、ロマンチ  
ストでウザい」

「佳奈子！」

草間くんの声に、佳奈子ちゃんはソファから立ち上がったってドアノブにしがみついた。

「お邪魔虫は退散しますーっ！ 本当にすみませんでした、深山先輩」

「俺には！」

「おにーちゃんの、へたれー！」

「佳奈子！」

ぎゃはは、と笑い声を上げて、佳奈子ちゃんは去っていった。

ぐったりと肩を落とした草間くんは、さっきまで佳奈子ちゃんが座っていた私の隣に腰を降ろす。

「兄妹以外の、何者でもないだろ」

「確かに」

苦笑しか、出来ない。

草間くんは大きく息を吐き出すと、天井に視線を向けた。

「今日、部活休みなんだよね」

「……うん？」

いきなり話が変わって、なんだろうと聞き返す。

草間くんは、じっと上を見ていて。

「これ、暗い中で見てみたくない？」

「え？」

これ？

草間くんの視線を辿る。

そこには、さつきも見上げていた天体写真。  
キラキラと、星が光ってる。

「さつき、深山さん言ってただろ？ 夜見たら、キラキラしてもっと綺麗だろうなって」

「あ、うん」

壁掛け時計は、まだ六限中を指していて。  
少なくとも、あと三時間はここにいる事になる。

嬉しいような、恥ずかしいような。

「いや、何もしないから。さつきは……ちょっと流されたというか  
なんというか。誰か来たら嫌だから、鍵は閉めるけど」

「鍵？」

「いや、ほら。早退したはずの深山さんがここにいるのばれたら、  
何言われるか分からないし」

いつもはあまり見ない焦った表情に、思わず噴出してしまった。  
口元を手で押さえても止められない。

草間くんは少し不貞腐れたような顔で、私を見ている。

「なんで笑うかな」

そう言われて止めようとは思っただけど、どうしても笑いが漏れる。

「だって、いつもの草間くんじゃないんだもの」

クラスの子の言葉じゃないけど、あんまり喜怒哀楽を表に出さない  
人なのに。

今日は、全部見れた気がする。

「深山さんは、すっかりいつもの君だね」

「ごめんなさい」

笑いながら謝っても、まったく意味はないだろうけど。

私はまだ機嫌の直っていない草間くんの袖を引っ張って、天井じゃなくて窓の向こうを指差した。

「暗くなるの待ってる間、聞きたいことがあるんだけど」

「何？」

草間くんは外じゃなくて私を見る。

私はさっき聞いてみようと思った、彼の好きな分野の問いを口にする。

「どうして季節ごとに、雲の雰囲気が変わるの？」

「え？」

聞き返す彼に、ほら……と指を揺らす。

それを辿るように、草間くんの視線が窓の向こうに向いた。

「秋とか冬の曇って、薄くてかすれてるじゃない。どうして？」

「ん？ ああ、それは……」

怪訝そうにしていた顔が、いきなりいつもの顔に戻る。

数学の挑戦状をといている時みたいな、淡々としているのに目だけは楽しそう。

この目を知っている人は、何人くらいいるのかな、とか思う。  
草間くんは私の疑問に、すらすらと答えていて。

思わず、目を細める。

「ね、草間くん」

すらすらと話していた草間くんが、ん？ と口を噤む。

「好き」

「……………」

今のトコ、この顔は私だけのもの、かな？

今日一日振り回された手紙を手に持ったまま、一気に真っ赤に変わっていく顔を私は満面の笑みで見つめた。

あとがき

篠宮です。

ここまでお読み下さりありがとうございます。

短編が苦手だったりするのですが、上手くまとまりましたかね……

初心者

書いてみて、改めて難しいなと思いました。

草間さんと深山さんのお話は、短編でまた書きたいなと思っています。

勉強のためって言うのが半分。

二人の日常を書いてみたいなと言う興味が半分。

上手く書けるようになりたいですねえ……

それでは。

完結までお付き合い下さり、ありがとうございます。

篠宮 楓

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1647t/>

---

一通の手紙

2011年5月15日08時32分発行